

# 働くって...

—フリーター・ニート考④—

## 若者自立塾

「た」。大学時代は、定年まで続けられると納得できる仕事を探していた。だけど、特にやりたいことはなく、就職活動もじっくりこなかった。一年間、中国に留学したが、何もう変わらなかった。

「僕の存在価値なんてない。こんなんだったら、早く人生を終わろう」。家での息苦しさ思い詰めた。そんな姿にたまらなくなったのか、親はニートを受け入れる「若者自立塾」を勧めた。二月中

旬、海水浴場に面する三階建ての旧ホテルを借りて開設した合宿所のドアを開けた。

「若者自立塾は、愛知県南知多町の「南セントレア キャリア・ビル」で活動している。大学などで就職指導してきた民間非営利団体(NPO)「ICDS(インテリジェンス・キャリア・デザイン・サポーターズ)」が、国から事業委託を受けて昨年八月から運営している。

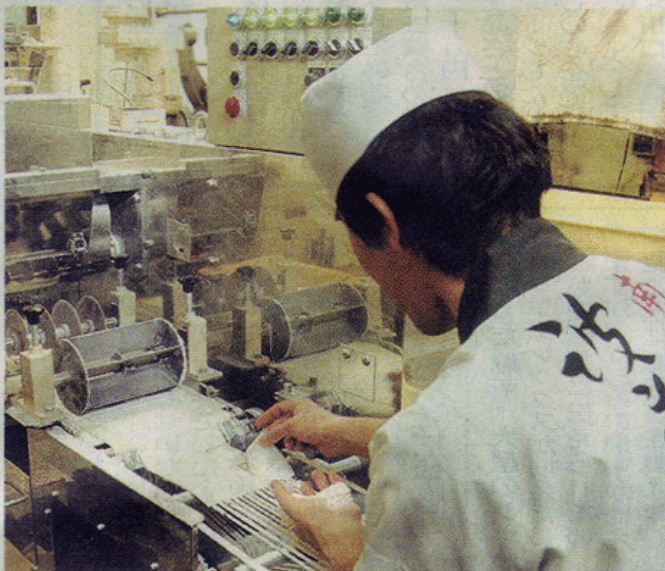
「ここでは午前六時起床、午後十一時消灯。規則正しい生活が三カ月続く。今、三期生となる二十二〜三十六歳の男女八人が暮らす。塾内の清掃や食事の用意は手分けして行い、午前中は就労体験としてホテルや和菓子店などで働く。午後からは、社会常識やコミュニケーション能力を高める厚生労働省認定の講座「YESプログラム」を受け、パソコンや簿記の資格を取るために勉強する。

「僕」の存在価値なんてない。こんなんだったら、早く人生を終わろう。家での息苦しさ思い詰めた。そんな姿にたまらなくなったのか、親はニートを受け入れる「若者自立塾」を勧めた。二月中旬、海水浴場に面する三階建ての旧ホテルを借りて開設した合宿所のドアを開けた。

朝七時半、起床。仕事に行く姉と妹を車で駅まで送る。家に戻ると自分の部屋でパソコンに向かう。昼からは図書館へ。たまにはアルバイト情報誌を手に取り、眺める。こんな生活が二年間。

愛知県内に住む智史さん(二〇)「仮名」は「年齢的に社会が受け入れてくれるのか。不安で一歩が踏み出せなかつた」。

# 仲間、と生活し仕事に度胸



和菓子店で就労体験する智史さん。ベルトコンベアから流れる生地をトレーに並べていく＝愛知県南知多町で

かく外で仕事をしたい。いつか、ニートだったところを笑い飛ばせたら」。智史さんは、せつせと手を動かす。

国の当初目標では、一団体に一期二十人、修了から半年で七割を就労させる予定だった。だが、定員が埋まらない。訓練生は一期から延べ四百三十二人(二月一日現在)。修了した二百五十人のうち、就労者は百十八人とどまる。

「収容所のようなイメージがあるから集まらない。若者が迷い、立ち止まっているとき、気軽に立ち寄れるような場所になりたい」。そう願う深谷さんだが、受け入れる企業側の事情もあり、試行錯誤は続く。「ニート問題に特効薬はない。地道にやっていくしかない」。

一期生八人のうち七人は職に就いた。三月から愛知県内のコンピューター会社で勤務する浩一さん(三〇)「仮名」は塾での体験を振り返る。「同じ境遇の仲間と一つの目標に向かって生活すると、気持ちも違った。どんな仕事だってできるんじゃないかって。度胸がついた」。

入塾したばかりの智史さん。近くにある和菓子店「櫻米軒」で就労体験を始めた。機械で流れる生地を並べていると、「手際がいいね」と声

### 若者自立塾

3カ月間の合宿形式による集団生活の中で生活訓練や労働を体験。資格取得や働く意欲と自信を持たせる。国のニート対策の一つで2005年度から始まり、20団体で実施している。訓練費として国から団体に塾生1人当たり28万6000円〜38万6000円が支給され、塾生は食費、教材費などを負担する。06年度は25団体に増える予定で予算は11億円。